新春文芸

―土浦の四季を詠んだ短歌・俳句―

春の短歌

故郷の小野の峰々春めきて
遠くにかすむ富士を拝む

荒井　洋子

昔東京の友と登った富士山を、今故郷の小野山から友と拝む幸せ、幾多の思い出を辿り乍ら、永遠の世界平和とコロナ終息を祈ります。

燕来る春となりたり騒がしく
古き軒端に小燕泣きて

井上　秀子

燕は今年も我家にやって来る。かつての我家であった賑やかな子育てが始まる。燕は来年もその先も来てくれるだろうか。

春の俳句

赤・白・黄　春を報せる風見鶏

高田　智子

運動公園のチューリップは風車を守る兵士のように整然と並び、異国情緒を満喫できる。風見鶏は市民に四季を報せてくれている。

鶯を真似て下校の児らたのし

山根　延子

別名、春告鳥とも呼ばれている鶯。下校のリラックスした様子は微笑ましく元気な児童たち。自然と共に大らかに育ってほしい。

夏の短歌

霞ヶ浦の水面に冴える色うつし
野鳥インコは声高く飛ぶ

三浦　清次郎

外出自粛がゆるんだ九月、霞ヶ浦まで自転車で行った。同じ思いらしい人も多く野鳥インコに見とれていた。

夏の日の桜川辺り木木に降る
雪かと紛う白鷺の群れ

田沢　郁子

桜川にかかる大橋を渡るときに目にする光景。白鷺の営巣地となっているようだ。通るたびに不思議な感動を覚える。

夏の俳句

筑波双嶺寄りそうており初夏に入る

土田　信子

土浦に住む恩恵の一つは筑波山を眺望できること。男体山、女体山の双つの嶺の容ちよく並ぶ青空の美しさ。もう初夏である。

宍塚や冷し素麺青屋箸

土屋佐奈江

土浦の西に位置する宍塚は、森や池など自然豊かな里山の環境が保たれている貴重な所。そこでの冷し素麺のおいしかったこと―。

秋の短歌

ポプラ並木霞ヶ浦辺に直立し
濃く光りおる秋となりたる

海老沢 幸子

霞ヶ浦の周辺は四季それぞれが美しい。特に、私は秋が好きだ。周辺の木々が、霞ヶ浦の水面の反射に色が濃くなる。

秋霖に冷え増す夜のレッグウォーマー
父は脚絆と言っていたっけ

小松﨑 みずえ

秋霖を過ぎる頃から、踝が冷える私は湯上りにレッグウォーマーを履く。戦争を知る父の、脚絆と言った言葉が今なお甦ってくる。

秋の俳句

新蕎麦や小町の里の登山口

沼尻 芳子

小町伝説にあやかる小町の里は穏やかな所。山水を利用した大水車が回り蕎麦処として有名。小町山への登山口もあり登りやすい。

新蕎麦や私をほぐす夕筑波

古橋 初子

百名山で名高い筑波山の四季の移ろいを肌で感じ暮らせるのは幸せである。新蕎麦の香りを喉越しに、家族安泰を改めて有り難く思う。

冬の短歌

冬晴れに筑波二峰の際立ちて
何かよき事ありそうな予感

平澤 良子

戸を開けると筑波山が見える。寒い朝、澄みきった空にどんと構える姿を見ると、守られているような気がするのだ。

新玉の霞浦にあまねく光り満ち
水面を白鳥群れて飛翔す

櫻井 雅江

霞ヶ浦の情景。眩しく広い大空へ羽ばたく白鳥の群は神々しく尊い。仰ぎ見送りつつ、世界への平和と幸せを祈りて。

冬の俳句

湖風をうごかしている枯蓮

加藤 節子

冬の蓮田は、枯蓮となり哀れな姿になる。しかし、あちこちで蓮根掘りが始まると、力強い風景になる。湖の風を動かすように。

水尾寄する一本の杭寒さ来る

田中 和子

霞ヶ浦で水鳥を観察していた折、一本の杭が目に留まりその杭を見続けていた。眼前の一景を切り取ることが出来た一時であった。